

バルザックとデボルド＝

ヴァルモールの関係考（Ⅱ）

西 節 夫

IV

マルスリーヌ・デボルド＝ヴァルモールは1834年3月19日に、二人の娘とともにパリを去ってリヨンに赴いた。夫のプロスペル・ヴァルモールがこの年の正月に同地のグラン＝テートル座と契約して、すでに出演していたからで、彼女のリヨン暮らしは以後3年間続き、1837年4月にパリに戻ったが、バルザックとの再会を確認するためには、さらに3年後の秋まで待たなければならない。

1840年10月4日に、マルスリーヌから当時ブリュッセルの劇場に出演していた夫にあてた手紙のなかに、次のような一節が見られる。「数日前にバルザック氏が訪ねて見えました。そのことはいずれお話ししますが、才能に加えて親切なお方です。」¹⁾ 一体マルスリーヌがバルザックに感謝すべき何があったのだろうか？ もっぱら夫宛の彼女の手紙を辿ることによって、以下のいきさつを知ることができる。

1839年の春、マルスリーヌ一家とラトゥーシュとの関係はむしろそれまでになく親密であったと思われる、4月下旬にはマルスリーヌは娘二人をパリ郊外オーネーのラトゥーシュの別荘に預けて、彼女自身もすくなくとも二度足を運んでいる。ところが、おそらく26日から28日までのオーネー滞在中、ラトゥーシュ留守の折にルイーズ・ブルニヨ Breugnot と名乗る婦人が訪ねてきて、ラトゥーシュとのあいだに一子をもうけながら彼に捨てられたこと、しかしなお彼を忘れられず、復縁と子供の認知を望んでいることを告白して、そのためにマルスリーヌに身を引いてくれるように哀訴したのであった。要するにこの女性は、ラトゥーシュの愛が去ったのをマルスリーヌのせいと信じて彼女を嫉妬していたので

あるが、マルスリーヌは「息の詰まりそうな逡巡」の末に、翌月上旬にいたって、ルイズ母子を引き取らない限りオーネーには二度と行かない旨を、ラトゥーシュに申し入れるのである²⁾。そんな彼女の強硬姿勢のおかげで、ルイズは一度はオーネーに戻ることができて、マルスリーヌに「永遠の感謝を誓う」手紙を寄せるが³⁾、この復縁も結局束の間に終わり、8月初めには別の家族がオーネーに住みついたのであった⁴⁾。

ところで、ルイズ・ブルニヨ出現の波紋は上記にとどまらなかった。マルスリーヌはルイズを知ると同時に、寛容なそのイメージとはまったく別人のように、ラトゥーシュを酷評するようになり、彼との親交をかたくなに忌避して、翌年までには一切の関係を最終的に断つにいたるからである。

マルスリーヌの8月(1839年)以降の手紙が明かしているところによれば、その真の理由はルイズの出現ではなく、上の娘オンディースに対するラトゥーシュの愛にあったと見られる。すなわち、ラトゥーシュは「この純潔な魂を汚そうとした」のであって⁵⁾、マルスリーヌは彼の誘拐から守るために、オンディースを当時リヨンにいた夫の許に向かわせたばかりでなく、単独で外出することを禁じ、さらに夫がラトゥーシュについて娘に質問することすらも、純な心には危険であるという理由で差し止めている⁶⁾。しかし一方、ラトゥーシュの弁明によれば、彼はオンディース(1821年、つまりマルスリーヌがヴァルモールと結婚してから3年後に生まれた)を自分の娘と信じていたのであって⁷⁾、真の理由は明らかに決して単純ではない。マルスリーヌの歌い続けた愛が彼女の日々体験していた感情であったか否かは、改めて注意を喚起するまでもなく、とりわけその詩のロマンチズムの性格を決定する点で鍵的な大問題である。が、あえて管見を記せば、1839年ないしは40年の最終的な絶交にいたるまで、彼女のラトゥーシュへの愛は、絶望あるいは諦観という形のもとにであれ生きていたのではあるまいか⁸⁾。すくなくともそう考えた方が、彼女がルイズの存在を知るや否やラトゥーシュに対して示し始めた拒否反応の異常な激しさは、より納得がいくように思われるのである。

話を〈バルザックとマルスリーヌの関係〉に戻そう。それは、とりもなおさず、マルスリーヌの生涯にわたる感情生活のなかで最大ともいえる危機をもたらしながら、結局ラトゥーシュの許を去らねばならなかつ

たルイーゼのその後を知ることである。というのは、バルザックは1840年10月1日に、フィリベルト・ルイーゼ・ブルニョル＝デロ Philiberte Louise Breugnol-Desraux 名でパッシーの住居の貸借契約を結んだが、爾後主人の好みにしたがって、ド・ブルニョル夫人あるいはド・ブリュニョル Brugnol 夫人と貴族めかして呼ばれるようになるこの名義人こそ、ルイーゼ・ブルニョにはほかならないからである。ルイーゼはマルスリーヌの世話で家政婦として、もっと正確に言えば家政婦兼愛人として、パッシーのバルザック家に落ち着いたのであった。契約の日付は先に見たマルスリーヌの夫宛の手紙のそれよりもまさに数日前であって、彼女がそこでバルザックに感謝しているのは、疑いもなく、彼がルイーゼ・ブルニョを引き取ってくれたことに対してであろう。一方、ルイーゼはマルスリーヌに対して感謝に満ちた友情を抱き続けることになる。

1841年から翌年にかけて、バルザックとマルスリーヌは頻繁に会ったが、彼らの関係の中心をなしたのは『キノラの手だて』(Les Ressources de Quinola) の上演問題であった。

バルザックは当初この作品をフランス座にかける考えであったが、マルスリーヌの希望を容れて、彼女の夫が俳優兼舞台監督として雇われたばかりのオデオン座で、それもドルヴァル夫人を起用して上演することにしたのである。この話がヴァルモール宅での会合でまとまったのが12月5日(1841年)のことで⁹⁾、マルスリーヌはその2日後に親友ポーリーヌ・デュシャンジュ Duchambge にあてて、この一件で彼女とブリュニョル夫人ことルイーゼの果たした役割を次のように打ち明けている。「わたしの分身であるあなたにはお分かりのように、蟻も役に立つのですわ。わたしがバルザック氏の戯曲の生みの親というわけではありませんが、彼が戯曲を書いて蟻たちにあたえ、さらにドルヴァル夫人のことまで考えてくれる気持になったのは、わたしのせいではしてよ。わたしはドルヴァル夫人を才能のゆえに、いいえ、なによりもあのひとの不幸とあのひとへのあなたの友情のために愛しているのですわ。わたしが悲しい胸の内を大声でうんと訴えたので、それを理解し、頷き合ってもらえたのです……誰を通じてかお分かり？ あの文学者殿に仕えて命をすりへらしている、例のあわれなティスベですよ。彼女が口を利いてくれて、ささやいたり、何度も繰り返し話してくれたのです。で、彼がやって来て、こういいましたの。『結構です。話はすべて決まりです』って。

ドルヴァル夫人は大役を演じますわ。』¹⁰⁾

しかし、この一件がどんなに〈蟻たち〉の期待に反する結果に終わったかは、とりわけゴスランのバルザック伝 (Balzac chez lui, 1863) 中における叙述によって、広く知られているところである。12月29日の脚本審査に間に合ったのは第三幕までであって、未完の部分バルザックが即興で片付けようとしたのに驚きあきれたドルヴァル夫人は、ラ・フォスティーナ役を辞退し、それでも作者の強気に支えられて、翌年3月19日に初演された結果はまったくの不入りで、わずか19回の上演で打ち切られてしまった。

『キノラの手だて』に、2年前の『ヴォートラン』(Vautrin) の失敗を帳消しにする成功即10万フランの収入を夢見ると同時に、『幻滅』以来不倶戴天の敵となったジャーナリズムに一矢を報いる魂胆であったバルザックにとっては無論のこと、有名小説家の芝居を上場することで年来の経営不振からぬけ出そうと図ったオデオン座にとっても、この不成功はまことに手痛い打撃であった。だが、最も同情に値する被害者はマルスリーヌであったともいえよう。一家の経済的な安定を願い、オデオン座側の直接の担当者であった夫とともに散々苦勞して上演にこぎつけながら、かえって窮境に陥る破目になったのだから。当時ロンドンにいた娘のオンディースは、ブリュニョル夫人の病氣そして手術という事態が重なったこともあって、母親宛の手紙のなかで、バルザックを傍迷惑な「嵐」orage または「旋風」tourbillon にたとえているが¹¹⁾、それはおそらくマルスリーヌが一時的にせよ抱いたひそかな実感をも代弁しているに違いない。

マルスリーヌは『キノラの手だて』上演問題を通して、vir nobilis だけでは片付かない途方もなく自己中心的なバルザックを知った。とはいえ、この幻滅事も彼らの友情関係に翳を残すことはなかったと思われる。バルザックはこの年にフェルヌ版『私生活場景』の三巻を、翌年には同じくフェルヌ版『地方生活場景』の初めの二巻を彼女に贈っている。実際、ファルジョ女史が述べているように、「バルザックがこれほど絶え間なく自作を贈ったのは稀であって、そこにマルスリーヌに寄せた敬愛の念の深さを見ることができる」のである¹²⁾。1843年以降、バルザックは仕事と病氣、それにハンスカ夫人との旅行に日々を奪われ、マルスリーヌの方は子供たちの世話と生活のための奔走に追われて、両者

の会う機会は急激に減ったと思われるが、1845年5月、バルザックがヨーロッパ巡遊の旅に出たハンスカ夫人一行と合流するためにドレスデンへ向かったあと、マルスリーヌはダヴィッド・ダンジェに対して、彼の許で働いていた息子のイポリットを通じて、この彫刻家の傑作であるバルザック像を見る「大きな喜び」をあたえてくれるように頼んでいる¹³⁾。

V

「マルスリーヌ・デボルド＝ヴェルモールに

フランドルの乙女にしてその現代の誉れたるあなたに、フランドルのこの素朴なる伝説を。

ド・バルザック」

バルザックは上記のような献辞とともに、フェルス版の『フランドルのイエス・キリスト』(Jésus-Christ en Flandre)を公式にマルスリーヌにささげた。それがこの短篇を収めたフェルス版「人間喜劇」第十四巻に記された日付通りに1845年内のことであったか、あるいは「フランス書誌」の刊行登録が示しているようにその翌年のことであったかは定かでないが、マルスリーヌは翌年、つまり1846年8月8日付の夫宛の手紙で、その事実を次のように明かしている。「『フランドルのイエス・キリスト』という、バルザック氏の心魅せられる作品がありましてよ。嵐の折に、イエス・キリストが客たちにまじって小舟に乗っておられるのです。そして客たちを救って下さるのですが、それはあの方がそこに姿を見せておられるとは知らぬままに、彼らがあの方を信じたからです。でも、あの方はそこにおいでになり、嵐は去ってしまいます。』¹⁴⁾

周知のように、フェルス版の『フランドルのイエス・キリスト』は、それまで独立した小品であった『教会』(L'Eglise)を吸収したもので、「素朴なる伝説」である中世の奇跡譚のあとに、7月革命直後に設定された教会をめぐる幻視体験が描かれている。したがってバルザックの献辞はいわば部分指定のそれであったが、マルスリーヌもまた前半部の梗概についてしか語っていない。実際、いかにもマルスリーヌ好みのこの奇跡譚は、彼女の末娘で早くから胸を病んでいたイネス(1825年生まれ)が、1845年から一進一退の病状のうちに次第に末期的症状を呈して46年

末には死にいたただけに、どんなにか深くその心をとらえたに違いない。マルスリーヌは上の文面を認めたすぐ次の日に、娘の容体が極度に不安定なことを嘆きながら、こう書き加えている。「本当にわたしたちは小舟に乗っているのですわ。そしてイエス・キリストがわたしたちに話しかけておられるのですわ。そうです。わたしにはそのお声が聞こえます。どうぞ一緒に耳を傾けて下さい……」と¹⁵⁾。彼女は『フランドルのイエス・キリスト』を、バルザックの願い通り、まさにわが身に引きくらべて読んだのであった。

この作品がもし1845年内に献呈されたのであれば、マルスリーヌがそれについて翌年8月の手紙で初めて夫に語っているのは、ファルジョ女史も見てるように、たしかに「奇妙なこと」に思われる¹⁶⁾。希望のない看病に精根つき果てたこの段階にいたって、彼女のいう「大きな大きな試練、日毎夜毎の責苦」のなかで¹⁷⁾、マルスリーヌは改めてこの贈りもののことを思い出したのだろうか？ いや、というよりも、贈られた時期の遠近はどうであれ、彼女はもはや信仰にしか救いのないことを夫にも十分に承知させて、かつてバルザックが『貞潔な妻』のなかで不幸のしるしについて述べていたように——そのくだりが、1833年に彼女からバルザックに贈られ、両者の友情の最初のあかしとなった詩集『涙』のなかの一篇に、銘句として掲げられていたことを思い起こそう——ひとりでは耐え難い不幸に「力を合わせて耐えられるようにするために、」この奇跡譚を援用せずにはいられなくなったのであろう。

バルザックは作品を通じて嘆きの母親を慰め力付けたばかりではなかった。この年の11月18日には、彼はさまざまな見舞の品と一緒にイネスに「やさしさに満ちた手紙」を送って、当時ブリュッセルの劇場で舞台監督として働いていた父親がパリに戻れるように全力を尽すことを約束している¹⁸⁾。翌月4日にイネスは逝き、その枕許に父親の姿はなかったが、弔問にかけつけたバルザックの様子をマルスリーヌは次のように夫に伝えている。「バルザックが見えました。親切で、すっかり動転していて、要するに例の見栄を張った、子供っぽいところなどないあの人でしたわ。」¹⁹⁾

ところでバルザックは、この同じ年の6月28日付ハンスカ夫人宛の手紙において、「これから『従妹ベット』(La Cousine Bette)に掛かろうとしています。これは恐ろしい小説で、というのも、主人公がわたしの母

とヴァルモール夫人とあなたのロザリー叔母上を組合せたものになるだろうからです」²⁰⁾と述べている。バルザックは母親の愛の薄さと無理解に加えて金銭的な細かさを恨んでいたし、ハンスカ夫人の正しくは従姉であったロザリー・ジェヴスカ伯爵夫人は、ハンスカ夫人との結婚を阻もうとして彼の敵意を買っていた。この二人と並んで、これまで見てきたように、1833年の出会い以来バルザックにとって変わらぬ敬愛の対象であった筈の、そして特にこの時期には彼がイネスの病気に深い同情を寄せて、『フランドルのイエス・キリスト』を献じたばかりだったマルスリーヌ・ヴァルモールも、〈嫉妬と復讐欲〉の不朽の典型人物となったリスベット・フィシュールのモデルのひとりとされているのには、いささかとまどいを覚えざるを得ない。両者のつながりについて、『従妹ベット』の注釈者たちは例外なくまず当惑しながらも、さまざまな推測を試みているが、彼らが一致して指摘しているのは、不幸な青春時代という共通点である。ロレーヌの水呑み百姓の娘からパリのしがたい飾り紐造りの女工暮らしへと続く、うだつが上がらないベットの境遇を描きながら、バルザックの脳裡にはおそらく、大革命による幼い日の父親の倒産から始まって、丁度ベットがボンズ兄弟の店で刺しゅうを習うように、女子修道院でにわかに覚えた針仕事で一家の生計を支えたこともあった、マルスリーヌの赤貧の娘時代のことが去来していたのであろう。『絶対の探求』(1834)で、ドゥエの社交界にデビューするフランドルの若き乙女マルグリット・クラスの容姿と印象が、マルスリーヌの若い頃の肖像画に酷似していることはすでに述べた。それがマルスリーヌの明の部分の投影であったとすれば、バルザックの最晩年の傑作において、彼女の暗の部分が女性主人公の不遇な身の上を設定するのにあずかったであろうことだけは確かに思われる。

早くもバルザックとマルスリーヌの永遠の別れについて見なければならぬ。バルザックは1848年6月に心臓肥大症の最初の発作におそわれたが、その症状が悪化していたにもかかわらず、同年9月19日にはハンスカ夫人を迎えるべくパリを発ってウクライナに向かった。彼が出発を10日後に控えてマルスリーヌに送った別れの手紙が残っている。原文のまま全部を引用する。

1848年9月8日消印

Les prières du poète sont des ordres; ils ne parlent pas, ils chantent, et les écouter, c'est être charmé. Voilà ce que je vous puis répondre, en vous faisant observer que ma porte n'a jamais été qu'ouverte tout grand pour vous; car elle vous écoute, et n'a pas de résistance contre la poésie; seulement, vous n'avez jamais songé, en v[ous] [otre] qualité de poète que l'humble prosateur est un travailleur à qui les 24 heures de la journée n'ont jamais suffi, et qu'il ne pouvait jamais grossir la cour que vous fait un grand nombre d'amis. Il ne peut qu'agir quand il le faut, et quand il sait qu'il le faut.

Hommages

de Bc.

Je quitte la France pour bien longtemps, je ne sais si vous me ferez la faveur de venir recevoir mes adieux, et je mets ici un souhait de bonheur pour vous et tous les vôtres. Si je finis par être utile au Français, peut-être, un jour, M. Valmore y aura-t-il la place que son mérite lui devrait valoir depuis longtemps et où il rendrait tant de services, et au théâtre et aux auteurs. Mille compliments pour lui.²¹⁾

本文はマルスリーヌへの返事であるが、彼女の手紙の方は残念ながら現存していないようである。マルスリーヌはそのなかでおそらく自宅への来遊を懇願しながら、バルザックの無沙汰を責めたのに違いない。それに対してこの文面は、〈詩人〉には〈しがたい散文書き〉の過酷な多忙さが分かってもらえないのだと、いささか恨みがましく抗弁しているよう。手紙を受け取ったマルスリーヌが自分の無理解を悔やんだかどうか、さらにまたバルザックが追伸で求めているように、彼女が別れの挨拶を受けるためにパシーを訪ねたか否かは確かめるすべもない。ただ知り得るのは、マルスリーヌがやがてこの手紙の文面の下に、「バルザックからの最後の大事な手紙」と書き込んだことである。ファルジョ女史がいみじくも述べているように、それは「バルザックの変わらぬ真実の友情の表明に対する最上の返答」²²⁾であったというべきであろう。

バルザックが遂に新妻となった異国の女とともにパリ・フォルチュネ街の新居に帰り着いたのは、それから1年8ヵ月たった1850年5月21日であったが、衰弱がはなはだしく、そのまま病床に伏して8月18日には世を去った。時に51歳。13歳年上のマルスリースより9年も早い死であった。この時期のマルスリースの手紙にはバルザックの死の反響を見ることはできないが、1852年初め、パッシーに移り住んだ友人から新居を訪ねるように誘われた彼女は、次のようにパッシーの地を再び見ることの耐え難い理由を明かして、招きを辞退している。これも原文のまま引用するが、文中のカロリーヌ・ブランシュはマルスリースが駆け出しの女優であった頃からの親友で、バルザックと同じようにパッシーに住み、彼より2ヵ月遅れて逝った女性である。大散文作家の死が閨秀詩人にあたえた悲しみの痛切さと彼との思い出の深さを示すものであろう。

Passy m'est douloureux à revoir...dépeuplé de ma chère Caroline Branchu et de notre bien-aimé Balzac. Vous, la meilleure et la plus constante des amies, vous avez le secret de cette hésitation du cœur devant une route qui amène à des souvenirs si déchirants.²³⁾

結 語

シャトーブリヤン、スタール夫人、メリメさらにはジョルジュ・サンドなどと同じ定めによって、バルザックはきわめて詩的な作家でありながら韻文の才能を欠いていた。それはバルザック自らも認めていたところであるが、彼の天才のすぐれた理解者であったテオフィル・ゴーチエは巧みな比喻でそのことを指摘している。彼ゴーチエも含めて、ユゴーに率いられたロマン派の作家たちは、神々の言葉である韻文と人間のそれである散文とを等しく駆使する二重の能力を天性具えていたのであって、彼らをたとえるならば鳥であり、対してバルザックは獅子であったというのである。いわく、「詩人たちにとって、散文まで降りてくるのは常にたやすいことである。鳥は必要とあれば歩くこともできる。だが、獅子は空を翔けない。生まれながらの散文家たちは、たとえ彼らが他の点でどんなに詩的であろうとも、詩まで上昇することは決してない

のだ。」²⁴⁾

『セラフィタ』はすべてが象徴である壮麗な散文詩であって、「人間喜劇」は総体として同時代の巨大な叙事詩となっているが、バルザックはまさに獅子であったし、一方、真情の吐露がそのまま独特な音楽性をもつ詩句となったマルスリーヌ・ヴァルモールは典型的な鳥であったといえよう。ちなみに彼女は『私生活場景』というバルザック風の副題を付した小説²⁵⁾をはじめとして、散文による童話にも筆を染めたのであった。1834年4月末に書かれたと推定されるマルスリーヌ宛の手紙で、「わたしたちは、フランスで散文と詩が近付ける限りは近くにいます。しかしわたしは、あなたへの賛美の念によって、いっそうあなたに近付くのです」²⁶⁾と述べているように、バルザックはそのことを、すなわち己れが獅子であり、彼女が鳥であることを強く意識していた。というよりも、マルスリーヌに対する友情はそもそも彼のその深い自覚から生まれたのであった。マルスリーヌに抱いた彼の気持のなかに、すくなくとも主要な一面として、地に伏えるものの空に鳴くものへの憧れといった感情が存在していて、それが彼らの友情をきわめて短期間のうちに頂点に到らせたであろうことは疑問の余地がない。

ところで、マルスリーヌがおおよそバルザックの作品の批評家ではなく、もっぱら心情的な読者であって、彼女の友情が文学的なものであるにもまして心のそれであったことは、すでにファルジョ女史の指摘している通りであるが²⁷⁾、一体、バルザックの方は詩人としてのマルスリーヌをどのように評価していたのだろうか？ 残念ながら、バルザックは彼女の作品にほとんど言及していないから、具体的な評価を知ることはできない。しかし、「彼女のあらゆる種類の詩が心のなかいっぱいに反響した」ことについて、それは二人ながら「涙と苦悩の国」の住人だから、と述べているように、また『生まれたばかりのわが子へ』を、いささか月並みな表現とはいえ、「最も崇高な詩の傑作」と形容しているように、苦悩にさいなまれた女性の真情や激しくも天使的な母性愛の真率な表現を、ボードレールの言葉を借りれば、「女性のあらゆる自然な美しさの詩的表現」²⁸⁾を、彼もまた愛し、高く評価していたのであろう。バルザックはマルスリーヌの詩をそれほど多くは読まなかったに違いないし、彼がその批評家的読者であったことをうかがわせるものも皆無である。とはいえ、彼女の詩の「涙と苦悩」のテーマに対する共感と真率

さへの評価は、バルザックの詩論ないしは詩人観と考え合わせるとき、特別の意義をもつように思われる。

バルザックは、抒情詩においても叙事詩においてもユゴーを第一人者としながらも、彼が「真実でない」²⁹⁾ こと、彼の詩ではすべてが「深く計算されていて」³⁰⁾、「心が欠けていること」³¹⁾をしばしば非難している。バルザックにとって、詩は第一義的に知性ではなく感受性の所産であって、それは感情の激しい高まりからこそ生まれるべきものであった。したがって、苦悩は詩の源泉であるばかりでなく、詩人たる者は苦悩の運命を避け難いのである。「すべてを表現するためには、すべてを感じる必要があるのではないのでしょうか？そして激しく感じることは、それは苦しむことではないのでしょうか？」、『幻滅』の詩人リュシアンがこのように述懐すれば、アングレームの司教は、あたかもボードレールを予告するかのよう、「詩は神聖なものです。詩はまさに苦悩です」という³²⁾。バルザックにとって、マルスリーヌはベランジェ、カジミール・ドラヴィーニュ、ラマルチヌ、ユゴーに比せられるような大詩人ではもちろんなかった。しかし、詩が深い悲哀の感情や激しい苦悩から生まれるものであって、知的な技巧よりも心の存在がその生命であるとするれば、マルスリーヌはバルザックにとって詩の源泉に最も近い詩人のひとりであったに違いない。

いうまでもなく、バルザックとマルスリーヌの関係は、親密さの度合においても、ましてや文学的な影響という点においても、たとえば前者とカロー夫人やジョルジュ・サンド、後者とサント＝ブーヴやデュマの場合に匹敵するようなものではなかった。とはいえ、それは散文と詩との、相互賛美と信頼と人間的なあたたかさに満ちた稀有な出会いとして、独自の意義と魅力をもつものであったといえるであろう。

ゴーチエの比喻によれば、バルザックは獅子であり、マルスリーヌ・ヴァルモールは鳥であったが、彼女をなぞらえるとするれば、なかでも山鳩こそ最もふさわしく思われる。『サーデイの薔薇』(Les Roses de Saadi)と並ぶ彼女の代表作である『娘と山鳩』(La Jeune Fille et le Ramier)でよく知られているように、山鳩は献身的な恋人とその嘆きを象徴するものとしてマルスリーヌの詩のなかに現われ、それらの詩はやがてマラルメによって「山鳩の生と死」と名付けられたほどだからである³³⁾。両者の出会いは獅子と山鳩のそれであった、という感懷を抱かずにはいられ

ないゆえんである。

〔注〕

- 1) *Lettres de Marceline Desbordes à Prosper Valmore*, éd. Boyer d'Agen, La Sirène, 1924, t. II, p. 23.
- 2) *Ibid.*, t. I, p. 142. を参照。
- 3) *Ibid.*, t. I, p. 164. を参照。
- 4) *Ibid.*, t. I, p. 211. を参照。マルスリースが「別の家族がオーネーに住みついた」と述べているのは、おそらくラトゥーシュ最晩年の愛人ポーリース・ド・フロジェルグ Flaugergues の出現をさしているのだろう。
- 5) *Ibid.*, t. I, p. 294.
- 6) *Ibid.*, t. I, p. 219, p. 224. を参照。
- 7) ラトゥーシュがそのことを最も明白に述べているのは、彼の従弟である Charles Duvernet 宛1839年8月21日付の手紙であろう。Janine Moulin: *Marceline Desbordes-Volmore*, Collection Poètes d'aujourd'hui, Séguier, 1955, p. 59. を参照。
- 8) *Ibid.*, p. 63. を参照。この問題については、L. Descaves, J. Boulenger, J. Moulin といったマルスリースの伝記作者たちのあいだで見解が分かれている。たとえば Boulenger は、マルスリースが愛し続けたのは一人の男であるよりも愛そのものであって、したがって彼女は架空の愛を歌っていたのだと説く (*Marceline Desbordes-Valmore, sa vie et son secret*, Plon, 1926, p. 269.) が、筆者には、それに反対する Moulin の見方が説得的であるように思われる。
- 9) H. de Balzac, *Correspondance*, éd. Roger Pierrot, Classiques Garnier, t. IV, p. 358 et n. 1. を参照。
- 10) *Lettre à son mari*, éd. *cit.*, t. II, p. 280. 「……例のあわれなティスベ」がルイーズを指していることはいうまでもないが、Thisbé とは Hugo 《Angelo》中の人物名である。
- 11) Madeleine Fargeaud: *Autour de Balzac et de Marceline Desbordes-Valmore*, *Revue des Sciences Humaines*, avril-juin 1956, p. 167, p. 168. を参照。
- 12) *Ibid.*, p. 169.
- 13) *Ibid.*, p. 170. を参照。
- 14) *Lettres à son mari*, éd. *cit.*, t. II, p. 150.
- 15) *Ibid.*, t. II, p. 151.

- 16) M. Fargeaud: Article *cit.*, R. S. H., p. 170.
- 17) Lettres à son mari, éd. *cit.*, t. II, p. 140.
- 18) *Ibid.*, t. II, p. 195.
- 19) *Ibid.*, t. II, p. 207.
- 20) Lettres à Madame Hanska, éd. Roger Pierrot, les Editions du Delta, t. III, p. 241. ブリュニョル夫人ことルイーズとバルザックの関係が、ハンスカ夫人をめぐる1846年以降悪化したことは周知である。バルザックはここでルイーズの名前を挙げてはいないが、彼女をベットの主要なモデルと見るのが一般である。
- 21) Correspondance, éd. *cit.*, t. V, p. 360.
- 22) M. Fargeaud: Article *cit.*, R. S. H., p. 171.
- 23) 1852年1月23日付 M^{me} Tripier-Lefranc 宛の手紙である。ファルジョ女史が上記論文の172頁で紹介している。
- 24) Théophile Gautier: Honoré de Balzac, Poulet-Malassis et de Broise, 1859, p. 120.
- 25) L'atelier d'un peintre. Scènes de la vie privée, Paris, Charpentier, 2 vol. 1833.
- 26) Correspondance, éd. *cit.*, t. II, p. 491.
- 27) M. Fargeaud: Article *cit.*, R. S. H., pp. 172-174. を参照。ポーリス・デュシャンジュとマルスリーヌ共用の読書抜書帳が現存しているという。ファルジョ女史の引用しているところによると、マルスリーヌはそこに、たとえば次のようなバルザックの文章を書きとめている。

《Le bonheur des autres est la consolation de ceux qui ne peuvent plus être heureux》(*Lys dans la vallée*) 《N'est-il pas dans la noble destinée de la femme d'être plus touchée des pompes de la misère que des splendeurs de la fortune?》(*Eugénie Grandet*) 《Le malheur fait dans certaines âmes un vaste désert où retentit dans la voix de Dieu》(*Scènes de la vie de province*)

「文章はバルザックのものであっても、その選び方は、感受性が強く、悲哀に満ち、心の高揚は神秘主義にまで至るマルスリーヌの性格を、驚くほどよく描き出している」とファルジョが解説しているように、マルスリーヌはもっぱら自分の心情にしたがって、それと密接に通じ合うものを求めて、バルザックを読んだのであった。

- 28) L'Art Romantique, Œuvres complètes de Charles Baudelaire, éd. Conard, p. 326.

- 29) Lettres à Madame Hanska, éd. *cit.*, t. II, p. 177.
30) *Ibid.*, t. I, p. 688.
31) *Ibid.*, t. II, p. 177.
32) Illusions perdues, La Comédie humaine, nouvelle éd., de la Pléiade, t. V, p. 207.
33) 平凡社刊『世界名詩集大成②フランス篇Ⅰ』122頁の訳注5を参照。